

浪江の

こころ通信

• 第60号 •



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先が見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

再取材シリーズ

再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から5年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のこころ通信／第60号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243(22)4218





小野田 順さん(大堀)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島
取材日：5月11日

浪江の方とおしゃべりするのが なによりの楽しみです

大堀地区の民生委員で、大堀老人会（清流会）の女性部長も務めていた小野田順さん。長男のお嫁さんの実家がある宮城県美里町に家を建て、ご主人・息子さん夫婦・3人のお孫さんとともに家族7人で暮らしておられます。避難中は腰の痛みにも悩まされましたが、手術を受けて全快。浪江の方でも地元の方とも積極的に交流し、活動的に過ごします。



▲美里町のご自宅の庭で草花を丹精する小野田順さん

◆現在の自宅に落ち着くまで
民生委員の役をおおせつかつていたので、地震が起きた当日は揺れが収まってから独り暮らしの方の自宅を回り、安否確認に務めました。うちは地盤が固いので家そのものの被害は少なく、避難を呼びかける放送も聞こえなかった。家族7人で避難したのは12日の午後3時頃でした。
まず川俣に向かい、それから会津若松、柏崎に避難した後、美里町にある嫁の実家に2か月ほどお世話になりました。その後、借上げ住宅に移りましたが、私らが元気づけに大堀に戻るのには無理だろうと覚悟を決め、2年前に家を建てたんです。

◆浪江の人と集う幸福な時間
美里町に避難した人はほとんどいないので、浪江の人が集まる
私も避難先で地元の方にとっても親切にしていたら、感謝しきれないくらいです。婦人会にも誘われ、皆さんの前で体験を話してほしいと頼まれたこともありま。今住んでいる場所も女川原発から30キロ圏内なので、私なんかでいいのかなと思いましたが、「原発は絶対に安心安全という意識ではだめ。危機感を持たなくては」ということをお伝えしたつもりです。

◆大堀に1泊でも泊まりたい
大堀には月1回くらい一時帰宅し、家の周りの草刈りをしてきます。自分たちの住んでいた家は帰宅困難地域とはいえないところ震災前とそう変わらない状態に見えますが、5年も住んでいないと行くたびに傷みが進んでいます。周りは草木が生い茂って家に入るまでが大変です。
この先除染が進み、1泊でも住める状態になったら、自分の家にもう1回住んでみたいーそれが夢です。



仲谷 貴美子さん(井手)

取材者：浪江町役場 佐々木・嶋原
取材日：4月18日

もらった命なんだから先のことだけ 考えていこう

仲谷さんは、二本松市でお母さんと娘さんとの3人暮らしをしています。楽しみは、震災前から習っていた三味線。猪苗代の先生と一緒に月に1回、老人ホームへ三味線と民謡の慰問を行っています。いろいろあったことを考えていてもしょうがないと、先だけを見ていく生き方にはパワーがあり、周りを元気にする力を持っている太陽のような明るい人です。



▲笑顔が魅力の仲谷さん

震災は、施設で夜ご飯を作り始めた時に起きました。とたんに電気が消え、ガス、水道とライフラインは全部だめになり、ひどい揺れのため外に出る、という指示で仕事着の半袖のまま外に出ました。余震が怖くて中に入らず、2時間みんな体を寄せ合い震えていました。ずっとそのままでもできないので、中に入って非常用の水と食料で夕飯を作り、翌朝のおにぎりを用意しました。その時は、明日になれば何とかなるだろうと樂觀していました。情報が一切なかったから何もわからなかったのです。
電話も通じず家族の安否がわからないままだったので取りあえず家に帰ることになりました。

◆民生委員として活動を続ける
避難中の無理もたたつてか高齢の母は亡くなり、主人も一時は塞ぎこむようになるなど、原発事故で想像もできなかったような辛い経験をしました。でも、私らより大変な思いをされた方も多いと思います。
そんな方のお役に少しでも立ちたい、そしてなにより浪江の人に会いたくて、南相馬市の原町地区に月1回ほど通い、避難中の独居高齢の方への訪問活動を続けています。地区の民生委員さんがメインで私はお手伝いという感じですが、「お元気でしたか？」と聞くと「元気だよ」と言ってくれる方がだんだん増えてきたのは嬉しいですね。

◆大堀に1泊でも泊まりたい
大堀には月1回くらい一時帰宅し、家の周りの草刈りをしてきます。自分たちの住んでいた家は帰宅困難地域とはいえないところ震災前とそう変わらない状態に見えますが、5年も住んでいないと行くたびに傷みが進んでいます。周りは草木が生い茂って家に入るまでが大変です。
この先除染が進み、1泊でも住める状態になったら、自分の家にもう1回住んでみたいーそれが夢です。



木村 郁也さん(権現堂)

取材者：浪江町役場 佐々木・嶋原
取材日：4月28日

町づくりの力になれるように



中学2年生の時(平成23年10月号)に「一番やりたいことはもっと走る」と話していた木村さんは、この春に高校を卒業し、役場職員として教育委員会事務局に勤務しています。中学1年生から町の代表としてふくしま駅伝に6年間参加し、キャプテン2年目の昨年はアンカーを務めました。中学・高校と走り続けた木村さんは、今、新たなステージで、新たな目標に向かって走り始めました。

震災の時は中学1年生で、卒業式が終わって家に一人で行きました。大きな揺れで物が倒れ玄関を塞いでしまったため、すぐに窓から逃げました。しばらくは家の前の畑に立ち、隣の家の屋根から瓦が落ちるものすごい音をただ聞いていた。幸い家族は全員無事で、その晩は車の中で寝ました。翌日は津島の知り合いの家、それから東和町、岳温泉、二本松の仮設住宅から借上げアパートと避難先が変わりました。

▲いつも笑顔のフレッシュな18歳です



ずっと剣道をしてきた自分が陸上で長距離を始めたきっかけは、小学6年生の冬に当時のふくしま駅伝の監督から練習へ参加してみないか

監督は、頑張っている姿を町民に見せたいと話しています。私も少しでもいい結果を見せて元気を与えられたらいいなと思っています。

震災の時に中学1年生だった自分にとって浪江は、山、海、川などの自然が調和していて、すくすく住みやすかったというイメージがあります。風景が良くて、走っていて気持ち良かった。河川敷が好きで良く走りまわりました。3年前に、震災後初めて浪江に帰りました。賑わっていた十日市の通りは閑散としていて寂しく、コスモスマラソンの通りの家は壊れていました。浪江の良い風景を知っているのに、「そういう町に戻っていきたくない」と、その時に思いました。

役場職員になりたいと思ったのは、大きく二つの理由があります。復興に携わって少しでも役に立ちたいと思ったこと。それから、駅伝でお世話になったスタッフに役場職員が多かったことで、自分が走るだけでなく選手をサポートしていく立場になれるんじゃないかという思いです。

今は仕事を始めたばかりで、何でも教えてもらっています。霧囲気には徐々に慣れてきました。これからのいろいろなことを覚えていって、皆さんが戻ってきてくれるような町づくりの力になれるように頑張りたいと思います。また、職員としてだけでなく、町民としても積極的に町おこしのイベントにも参加していきたいと思っています。



木幡 サチ子さん(立野)

取材者：茨城NPOセンター・コモンズ 横田/浪江町復興支援員 田中・森
取材日：4月27日

つくばでもお店やお話を始めました

木幡さんは、原発災害により、茨城、千葉を経て1年前につくば市に移住。再開したエステサロンを営むかたわら、近隣の避難者の皆さんが集える機会も提供しています。



▲自宅に併設されたエステサロンの入り口を背にした木幡さん

◆2回目の再出発
平成25年4月の「広報なみえ」で紹介された時は、千葉県東金市の借上げ住宅に避難していました。そこでエステサロンを再開したり、避難先の市役所や浪江町復興支援員にもご協力をお願いして、千葉に避難している近所の方々と交流会や旅行をしたり、千葉県内で開かれる福島の方の集まりに参加するなどしていました。当時夫は福島で仕事をし、息子も県外、母は妹の家のある茨城県つくば市に

◆つながりを作り、人を元気に
つくばにはまだ知人が少ないものの、着付け教室に参加した

いて、自分は娘と暮らしているところ。千葉県に来て4年目に、借り上げていた住宅を購入する。娘が千葉の短大に通う必要があること、自分もエステの仕事は続けたいこと、福島の家も管理する必要があること、などいろいろ考え、母が暮らしていたつくばに移る決意をし、店舗も兼ねた家を新築することにしました。ここに住もう直ぐ1年になります。

夫も退職して福島からつくばにきて、バラバラに暮らしていた家族が共に暮らせるようになりました。母は野菜作り、夫は造園の仕事とサッカーで汗を流し、震災の日中学校を卒業した次女は短大を卒業して、人の役に立ちたいと障害者支援施設で働いています。そして自分は、浪江、東金に続き3回目の開業となるエステサロンをつくば市高崎に開いています。

前回(平成25年4月)の「こころ通信」同様、私は人を元気にすることが大好きです。エステの仕事も、人に喜ばれ、人とのつながりを作れる仕事なので、この地を使命の地と決め始めました。浪江の家や田畑のことも気になりますし、ここは浪江に帰りたいですが、今はこの茨城で友達を増やしながら暮らしていきたいと思っています。そして今後も福島や浪江町とのつながりを大事にしていきたいです。